

3章-2

組織の異文化コミュニケーション

——「ホスピタルリーチ・プロジェクト」

村田麻里子（東京大学大学院学際情報学府博士課程）

本研究は、「メディアとしてのミュージアム」研究の一環をなし、ミュージアムと病院という異文化をもつ組織同士をつなぐことによって、それぞれの組織と社会の回路をつくることを目指すプロジェクトである。実践メンバーは村田麻里子（東京大学大学院学際情報学府博士課程）、塚瀬三重（東京大学大学院学際情報学府修士課程）、林直哉（長野県梓川高校）、境真理子（日本科学未来館）の4名であった。以下に、実践の概要を報告する。

1. ホスピタルリーチ・プロジェクトとは

1-1. プロジェクトの立ち上げ

ミュージアムと病院を連携させることで、社会から「閉じた」組織同士をつなぎ、それぞれ社会との回路をつくる。そんな発想から、2002年、当時修士2年の塚瀬三重と共に「ホスピタルリーチ・プロジェクト」を立ち上げた。「ホスピタルリーチ」とは、コミュニティに向けてサービスを提供することを意味するアウトリーチ（outreach）をもじった造語である。博物館では自らのコレクションやそのレプリカを使用した移動博物館や、出前授業のような館外での活動をアウトリーチと呼ぶことが多い。今回の実践は、ミュージアムのスタッフが病院に赴き、館の資源を活用したワークショップを院内で実施するプログラムであることからこのような名をつけた。

実践メンバーはファシリテータ兼コーディネータとしてミュージアムと病院の間を頻繁に行き来し、そのコミュニケーションを媒介するという役割を担った。したがって、自らが組織同士の異文化コミュニケーションを紡ぎながら、同時にフィールドワーク的に観察するという構造をもつプロジェクトとなった。

1-2. プロジェクトの射程

我々は病院や院内教育機関に関する下調べとインタビュー調査を経て、以下のような複合的な射程をもつプロジェクトを立案した。

- ・病院や院内教育機関と連携することでミュージアムの活動の枠を広げ、社会における新たな回路作りを行う
- ・院内の患者たちが普段接する機会の少ないミュージアムの活動や資源とじかに触れる機会をつくることで、自己表現や生きる意欲へとつなげるきっかけを与える
- ・回路作りを通じた社会のノーマライゼーションを目指す。患者が外部と接触することで得られる効果と同時に、外部（ミュージアム関係者など）が患者と接触することで得られる効果に注目する。
- ・異なる組織同士をつなぐことにより、組織間の異文化コミュニケーションをめざす

すなわち、ミュージアム側からみれば、公共サービスの拡大とそれによるアクセシビリティという論理になり、病院側からみれば、QOLの向上と社会のノーマライゼーションという論理に、そして院内教育機関側からみれば子どもたちの学ぶ意欲の喚起と授業の質の向上という論理になる。そしてメタレベルで見れば、それぞれの組織の社会との回路作り、異文化コミュニケーションという大きな目的がこのプロジェクトに内在する。

このプロジェクトの背景には、メルプロジェクトの目指すメディアに媒介された「表現」と「学び」、そしてメディア・リテラシーについての実践的研究という位置付けがある。博物館、病院、学校、大学、メルプロジェクトという組織が重なり合う「ホスピタルリーチ・プロジェクト」は、メディア・リテラシーの重要な鍵となる異分野交流、異文化コミュニケーションが大きなテーマになっているのである。

2. 実践について

本プロジェクトでは、3回の実践が行われた。はじめの2回は、同じ連携の組み合わせで行われ、院内学級もミュージアムも、ともに東京大学敷地内にある組織である（以下、東京実践）。3回目は、長野県にある養護学校と東京のミュージアムとの連携をはかった（以下、長野実践）。

2-1. 東京実践

東京実践では、東京大学キャンパス内にあるミュージアムと病院に焦点を当てた。東京大学総合研究博物館（以下、東大博物館）と、東京大学医学部附属病院内（以下、東

大病院)の東京都立北養護学校東大こだま分教室(以下、こだま分教室)の連携は、同じ東京大学敷地内にありながら全く交差することのないふたつの組織をつなぐというプロジェクトであった。

こだま分教室は、東京都立北養護学校に属し、東大病院内に分教室という形で設けられている院内教育機関である。高度な医療技術を提供する大学病院内にあることから、在籍する子どもたちも悪性新生物をはじめとする重い病気に罹患している場合が多い。子どもたちは地元の学校から学籍を移し、転校という形で入院のあいだ在籍する。教員は2002年には8名、生徒は小学部・中学部・高等部あわせて月間平均15名の病気療養児が在籍している。

(1) 東京実践1号

実際の交渉は、決して容易ではなかった。病院および院内学級ではプライバシーの問題が常につきまとうため、外部に対して極めて慎重な姿勢をとっていた。我々の趣旨を理解してもらい許可をもらうに至るまで、こだま分教室に何度も足を運び、教員と交渉を重ねた。ここでは土屋忠之教員が仲介のために尽力してくださった。

実践は2002年12月19日に「こだまの時間」という「総合的な学習」の時間を利用して行われた。東大博物館の西野嘉章教授がこだま分教室に館のコレクションを持参して赴き、「ダイヤモンドってなんだろう? 文化と環境の視点からその魅力を探る」というテーマでワークショップを実施した。西野教授がギャラリートークを行った後、筆者と塚瀬がワークシートを用いて子どもたちとミニ・ワークショップを行った。病室にいくことができなかつた子どもに対しては、その後同じ資料を使ってこだま分教室の教師がベッドサイドで授業を行った。

(2) 東京実践2号

第1回目の実践から半年後の2003年7月に、第2回目の実践が行われた。2回目は、土屋教諭が異動になったため、かわって吉田教諭が窓口となった。初回の実践では何度もこだま分教室に足を運び、信頼関係を構築していく必要があったが、今回は2回目ということで試みは容易に認められた。吉田教諭の積極的な関心が一番の要因だが、前回の実践例があることから、その他の先生方にも我々のやろうとしていることがイメージでき、またミュージアムという場所に対してリアリティをもつことができたことも大きい。同時に、こだま分教室の先生方が、我々の実践の意味をある程度理解してくれていたということができる。

今回は東大博物館の佐々木猛智助手がワークショップを実施し、実践は2日間に渡って行われた。1日目は、新聞記者になったつもりで、貝の研究をしている佐々木先生に取材をし、それをもとに記事を書くというもので、ここでは生徒が自ら書く記事のために質問を考えなくてはいけない。これはのちに我々実践メンバーが新聞の形にまとめ、



写真1 実践題材の貝を準備する佐々木猛智助手

東大病院にあるこだま分教室の展示スペースに張り出した。2 日目は、モノ（貝）をよく観察するという目的で、自ら選んだ実物の貝をスケッチし、それを最終的にはアイロンプリントでTシャツにするというものであった。



写真2 東京実践の様子

2-2. 長野実践

次に、東京実践を糧に我々メンバーは、「大学」という枠をはずした連携を行うことはできないかと考え、次の実践を計画した。連携先は、メルプロジェクトのメンバーが関係する長野県寿台養護学校（以下、寿台養護学校）と日本科学未来館の2機関であった。今回は、長野県松本市にある寿台養護学校に、東京から日本科学未来館のスタッフ3人が我々とともに赴き、ワークショップを行った。このときには塚瀬が修士課程を修了・卒業していたため、メルプロジェクトのメンバーは、筆者と林直哉、境真理子の3名となった。

いずれも組織の規模がはるかに前回より大きいことから、寿台養護学校には当時 PTA 会長をしていた林が、日本科学未来館にはスタッフである境真理子がそれぞれ交渉にあ

たった。そのうえで、筆者は林と長野県へ向かい、今回のインフォーマント役である常盤貞夫教諭や塚原明水校長先生と話し合いをもち、正式な許可をもらった。一方、日本科学未来館での調整（許可申請及びメンバー選び）は、境が担当した。そのうえで、筆者も同館に赴き、企画の意図を伝え、今回のスタッフである小川陽子氏と島田卓也氏と話をした。

日本科学未来館は 2001 年にオープンした東京のお台場にある科学館である。ここで、2003 年 3 月 19 日から 6 月 30 日まで、時間についてさまざまな観点から考える展示『時間旅行展』が行われ、それに付随して同館の科学技術スペシャリストらが開発したワークショップが行われた。今回はそれらを応用して寿台養護学校に 3 日間にわたる時間のワークショップを届けることになった。

寿台養護学校は、隣接する国立療養所中信松本病院に入院・治療しながら通う生徒が在籍する病弱養護学校である。普段から生徒たちに陶芸をさせたり、ビオトープをつくらせたりと、多くの活動を取り入れた活発な活動をおこなっている。子どもたちの症状は、こだま分教室とは異なり、慢性的なものが多い。喘息のために埃のたつ環境での活動が困難な子ども、集中力が持続しない子ども、手の震えがあり細かな作業が出来ない子ども、糖尿病のために低血糖になる可能性がある子ども、視野狭窄や聴力の弱い子どもなど、あらかじめ症状を把握したうえで、ワークショップの内容を未来館と練った。実践内容は以下の表 1 に示す。



写真 3・4 長野実践の様子

		2003 年 7 月 3 日・23 日	7 月 29・30・31 日
連携先	東京実践 1号 東京大学総合研究博物館	東京実践 2号	日本科学未来館 長野実践

表1 「ホスピタルリーチ・プロジェクト」実践表 東京都立北養護学校東大こだま分教室		長野県寿台養護学校	
院内教育 機関の 種類	肢体不自由養護学校の分教室(院内学級)		病弱養護学校
実施の 枠組み	こだまの時間 (2 コマ分)	こだまの時間 (2 コマ分)	学校開放日 (午前中)
内 容	<p>ステップ1 西野先生によるギャラリートーク 「ダイヤモンドってなんだろう？ 文化と環境の視点からその魅力を探 る」</p> <p>ステップ2 ワークシート1 ・今日のはじめて知ったことを書いて みよう ・好きなダイヤモンドはどれ？(好 きなものを選ぶ・写真をとる) ・名前をつける・なぜ選んだのか を書く ・おまけ：ダイヤと写真をとろう！</p> <p>ステップ3 (時間外) ワークシート2を用いた調べ学習 ・ダイヤモンドが地面に埋まっている 様子を絵にしてみる ・ダイヤモンドは何に使われている か ・ダイヤモンドを宣伝するポスター を書いてみる ・ダイヤモンドがとれる地域に印を つける</p>	<p>第1回目 新聞記者になったつもりで貝の研究 をしている佐々木先生を取材、記事 を書く ・佐々木先生の話 ・記者による質疑応答・インタビュ ー ・記事の構想を練る(記事の内容、 レイアウト、とりたい写真) ・新聞の構成(こどもたちでレイア ウトを話し合う) ・新聞はのちに張り出し・配布され る ・ワークシート(兼調査シート)</p> <p>第2回目 貝のオリジナルTシャツをつくる う！ ・気に入った貝をコレクションから 選ぶ ・Tシャツのデザインを考える ・貝をスケッチして、絵の具で色を つける</p>	<p>第1日目 企画展示「時間旅行展」の案 内。切り株、貝のから、地層 など、可視化された時間(時 間が目のプロセスとしてみえ ていること)を体験する。自 分の時間を切り株の年輪で刻 み、人と共有する。</p> <p>第2日目 時間の錯覚を体験する。残像 現象をもちいたフリップブッ ク作り。</p> <p>第3日目 精神テンポを体験する。ピー トマシンを用いて心拍・呼 吸・歩行速度など個人のなか の「ピート」を可聴化した り、聴き合う。朗読ゲームで 流れた時間を予測する *WSの様子は松本病院内にも 展示された</p>
評価方法	観察記述・生徒を対象としたアンケ ート調査(ワークシート埋め込み 型)・教員を対象とした事後アンケ ート調査とフォーカス・グループ	観察記述・生徒を対象としたアンケ ート調査(ワークシート埋め込み 型)・教員を対象とした事後アンケ ート調査とフォーカス・グループ	観察記述・教員や日本科学未 来館スタッフらとのフォーカ ス・グループ、生徒および教 員を対象とした事後アンケ ート調査

2-3. 実践の評価

東京実践、長野実践のいずれも、参加した子どもたちと先生方全員に事後アンケートをお願いした。「総合学習」を担当する教諭には、さらにフォーカスグループでの事後インタビューを行った。ミュージアムスタッフにも、事後インタビューを行った。

ワークショップは、いずれも非常によい評価を得ることができ、参加してくれた子どもたちや先生方も喜んでくれた。また、ミュージアムと病院の連携の型をつくったこと

や、子どもたちが短い時間であれ楽しい時を過ごせたこと、子どもや教員にミュージアムの可能性や面白さを知ってもらったことなど、一定の成果を得ることができた。

しかし、そうしたワークショップそのものの評価とは別に、この実践をフィールドワーク的に見ていくと、組織の異文化コミュニケーションは常に起こり続けたといえる。場面場面において発生する大小さまざまな衝突は、組織内では当たり前となっていることが実は当たり前でないことが露呈する瞬間であった。それは、外国人同士が異文化コミュニケーションによって、自らの常識が実は地域や国に限定されたものであることに気がつくのと同じことである。異なる組織をつなぐことの意味は、ここにある。

3. まとめ

では、なぜこのように苦勞の多い異文化コミュニケーションが、組織にとって必要なのだろうか。

本プロジェクトは、ミュージアムと病院というふたつの組織をつなぐことを通じて、社会との回路作りを目指すことから始まった。具体的な実践内容は、ミュージアムスタッフが我々のファシリテートのもと、病院あるいは院内教育機関という空間に出向き、そこでワークショップを行うというきわめてシンプルなものであるが、それを実現していくプロセスは困難を極め、両者間のパイプ作りを妨げるいくつもの問題が浮かび上がった。結果としてホスピタルリーチ・プロジェクトは、ミュージアム、病院、学校、大学などさまざまな組織の価値観が衝突し、せめぎあう場をつくることになった。そして、そのようなせめぎあいにより、それぞれの組織に完全に身体化された固有の「組織カルチャー」が異化されることになった。いいかえれば、こうしたプロセスは、それぞれの組織を組織たらしめる構造を浮かび上がらせるきっかけをつくるのである。

ひとくちにフィールドワークといっても、ただ対象を観察しているだけでは、こうした組織の体質は浮かび上がってこない。それは「つなぐ」というプロセスの中で、組織同士が摩擦と衝突を繰り返すからこそ露呈するものである。また、このような実践がベースにあるからこそ、組織が硬直化したり、問題が生じたとき、改善への方向性が見えきりと見えてくるのだといえる。

最後に、異文化をもつ組織同士をつなぐホスピタルリーチ・プロジェクトは、大学という組織を背負う我々にも跳ね返ってくる。自ら「つなぐ」という行為を仕掛ける今回のような実践では、ミュージアムや病院をただ遠くから眺めて批判する傍観者でいることはできない。大学という組織にメルプロジェクトが拠点を置いていることもまた、このプロジェクトの本質的な課題のひとつなのである。大学という組織が社会とつながり、実践的な研究をしていくことの意義と可能性について、これからいっそう本格的に見ていく必要があるだろう。

